

## 「自己確立」… 眞実を見極める力

合掌

小中学生、高校生にとっては長い夏休みが終わりましたね。大学生はまだまだ夏休みかな。一般の方は、夏休みの取得が分散されてきているようで、それぞれと言ったところでしょうか。夏も終わりですね。

さて、夏休みに入る前、今年は戦後70年の年になるので、おそらく戦争に関する報道やテレビ番組が多いでしょうから、なるべて、観たり読んだりするように法話の中で話していました。どうでしたか。夏休み明けの道場での法話で、私の実家の大分の話をしました。そこで、大分には、最後の特攻隊出撃基地があるという話をしました。8月15日正午の玉音放送後、夕方、宇垣纏中将率いる特攻隊が出撃したのです。しかし、終戦後の武装解除命令後のことなので、正式には「特攻隊」とは認められていないそうです。宇垣中将は、自分が特攻隊員たちを見送る時に「自分も必ず後から往く」と言っていた責任を果たしたかったのでしょうか、命令に従って飛び立ち、失われた18名の若者の命は、本来なら死なずに済んだ命だったのです。昨年もさくら通信で書きましたね。

満州事変から太平洋戦争終戦までの15年にも及ぶ戦争で、多くの命が失われました。戦闘で亡くなった人、空襲で亡くなった人、原爆、その他多くのことで、日本だけでも310万以上の人の命が失われたのです。開祖は、戦争の中に身を置き、戦争中、そして戦後の日本の姿を目の当たりにし、二度と戦争をしてはならない、戦争のない、真に平和で豊かな社会を実現していきたいと考え、そのためには、「半ばは自己の幸せを、半ばは他人の幸せを」本気で考え行動できる人を、一人でも多く育てていく以外にないと、人作りとしての少林寺拳法を創始しました。

太平洋戦争というと、軍部が独走し、国民を無視して戦争に突っ走っていったという印象がありますが、実際はそうとも言い切れません。当時、民衆の声や力もかなり政治に影響力を持ってきており、軍部に一方的に支配された国民が、戦争に巻き込まれていったというわけでもないようです。いわゆる「民意」というものにも、戦争推進のものがあつたようです。太平洋戦争末期には、かなり軍部による強制力が強まっていますが、日中事変の始まる以前は、大正デモクラシーと言われるほど、人々の「自由」のエネルギーが広がっていった時代でした。戦争への道りを現代から見れば、客観的にその原因や要因をつかむことが出来ます。しかし、当時、どれだけの人が、太平洋戦争の悲惨な末路を想像することが出来たでしょうか。当時の国の教育が軍国主義的になり、皇国史観という偏った価値観においてなされた結果とえばそれまででしょうか、多くの人が、戦争を“正義”と考え、日本は勝つと信じていたのです。

少林寺拳法の修練の目的に「自己確立」があります。「何事にも負けない本当の強さを身につけ、愛と勇気と慈悲心を持ち、行動できる」ということです。ここに忘れてはいけないのが、「眞実を見極める力」だと思います。昭和初期、いや明治維新の頃より、日本は世界に冠たる国家たるべく、富国強兵の道を歩んできました。その結果が、太平洋戦争の敗北とあの焼野原だとしたら、いったい何を指して日本は近代化の道を歩んでいたのか。しかし、当時の指導者たち、国民たちは、今の私たちと同じように、誰もが、豊かに、そして幸せに生きたいという願いを持っていたことには変わりはないと思うのです。では、何が間違っていたのか。後からは何とでも言えますが、2度と同じ間違いを繰り返さないためにも、検証することはとても重要です。そして、大切なこと、それは、いつの時代にあっても、惑わされることなく、「眞実を見極める力」を持つことです。

現代社会は、情報にあふれた高度情報化社会です。その情報は単に溢れているというだけではなく、相互につながりあつた「コンピューターネットワーク社会」です。社会は常に変化し、価値観も一定ではありません。そんな社会において、自分の考え方の軸をいかに作っていくのか、情報に翻弄されるのではなく、情報を正しく捉え、理解し、判断する力を持つこと、これが、現代における「自己確立」ではないかと思うのです。それには、私たちは、多くの事から学び、考えることを怠ってはなりません。自ら様々なことに問題意識を持ち、考え、学び続けていく必要があると考えます。

結手